



「相在室」の扁額のある部屋(写真:奈良県立大学ユーラシア研究センター)

猪飼敬所【いがいけいしょ】

1761～1845 近江生。江戸後期の儒学者。京都の人で名は彦博、字は希文。経学を主とする折衷学派に属した。著『論孟考文』『孟子考文』など。

尊王攘夷【そのんうじょうい】

日本で江戸末期、天皇を尊び政治の中心とする「尊王」と、外国を追い払う「攘夷」とが結びついた思想。朱子学の系統を引く水戸学などに現れ、下級武士を中心に全国に広まり、王政復古・倒幕思想に結びついていった。

森田節斎【もりたせつさい】

1811～1868 大和五條出身の幕末の儒者。頼山陽に師事し、昌平黌【しょうへいこう】にまなんで京都、備中倉敷などに塾をひらく。天誅組の変のあと紀伊那賀郡にかくれ、慶応4年(1868)死去。

蘭学【らんがく】

江戸時代中期から幕末にかけて、オランダ語、およびオランダ語を通して行われた西欧諸科学、技術および西欧事情の学習研究とその知識をいう。



榎原市八木町にある谷三山生家

飼敬所から、八木を訪れて当室で三山と語り合ったことをなつかしんで贈られてきたものでした。



三山は、この部屋でほとんどのときを過ごしながらか、書物を通して世界の動きを見つめていたのです。

そうした彼が、晩年の文久・元治期に「尊王攘夷」の立場をとることを表明し、攘夷の決行を強く求めるようになった、ということは事実ですが、その背景には、開港以降の社会状況の変化と庶民の動きがありました。諸物価が高くなるなか多くの人々が困窮に陥るようになり、そうした状況を打開し、民生の安定をはかるためには攘夷を行うことが必要であると考えようになったのです。

彼は天下と国家を論じながらも地域に生きる人々の生活、すなわち「世ノ愚婦愚夫」の願いに思いをはせ、民生の安定をベースに立論するという姿勢を一貫してとっていました。

三山はほとんど独学で学問をし、家塾「興譲館」を開いて、多くの門人を育成しています。その一人にわが国の「近代紡績の父」と称される石河正竜、通称確太郎がいました。

今日は地元(石川町)からもおみえですが、確太郎は文政8年(1825)に高市郡石川村(劔池や孝元天皇陵の所在地で知られる地)に生まれました。若いときに三山の薫陶をうけたのち、苦学しながら江戸や長崎に赴いて蘭学を学び、安政4年(1857)に、開明的な名君でよく知られる島津斉彬により薩摩藩に召しかかえられました。グローバルな視野のもと、幕末・維新期に薩摩藩の殖産興業政策の推進に大きく貢献し、廃藩置県のものには新政府に出仕して、近代産業なかでも綿糸紡績業の育成ために奔走しました。

本日は、まず2017年12月の「三山没後150年記念フォーラム」のレジユメの増補版にもとづきながら、三山の活動の概要を紹介したうえで、石河正竜の言説と活動のあり方について主に話すことにしたいと思います。

高取に過ぎたるもの

幕末の大和を代表する儒者であった宇智郡五條村出身の森田節斎は、「高取に過ぎたるものが二つあり 山のお城に谷の昌平」という一

首を残しています。山のお城は高取城、谷の昌平は谷三山のことをさします。

南八木村は高取藩領で、三山は高取藩の儒者として召しかかえられました。生まれたのは享和2年(1802)で、生家は桜井から八木に移ってこられた家でした。三山が生まれたころには米穀商を営んでおり、商売が活発で豊かな家でした。三山は十代半ばで聴力を失ったため、なかなか家業の手伝いができない状況にありましたが、幸いお父さんや兄さんが家のことをしっかりやっておられ、さらに学問に理解あって、大坂の本屋から本をどんどん購入され、そのような環境のもとで三山は、若い頃に数千巻の書物を読破するなど、ほとんどを独学で学識を深められていきました。

そうやって身につけた学問をもとに、三山は、①天保の改革の頃、②ペリーがやってきた開国の時期、③欧米列強と通商条約を結んで以降という三つの時期にわたり、政治的な意見書を提出しています。

今日は、時間の関係で①の時期の意見書については省略し、②開国の時期、ペリーがやってきたときに提出された『靖海芻言』【せいかいすうげん】、すなわち外交問題を解決する具体策という意味合いの意見書をとりあげます。

ご存知のように、幕府はペリーがやってきたときに国書を受け取り、一旦帰ってもらったうえで、再度来るまでに、わが国がアメリカからの要求にどうこたえるかを決めることになりました。このときの老中首座は阿部正弘という人で、大名や幕臣たちに意見を聞きました。

これに応じて、田原本に陣屋を構えていた旗本平野氏の家中でも意見書を提出しようとする動きがあり、三山の門人の一人であった吉村信之助がその草案の文章作成にあたっていたところ体調をくずし、文章を書き上げてほしいと三山に依頼してきました。こうした経緯により三山が、長文の『靖海芻言』と題する意見書を作成し、提出することになったのです。

そこでの結論は、「大抵通好ヲ絶ノ害ハ近クシテ小ナリ、通好ヲ許スノ害ハ遠クシテ大ナリ、禍ヲ扱フハ軽キニシクハナシ」というもので、アメリカとの通交関係を結ぶことは拒絶すべきであるという考えが示されています。けれども、その主張は決して闇雲なものではなく、当時の国際情勢とわが国の現状を踏まえたものでした。

「たとえ通好を許されることになっても、兵備を整えていくことは必要であり、拒絶される場合には、海辺は言うまでもなく内地においても、しっかりとした防御の策を講じ、精兵を的確に配置して要所を固めなければならない」また「現時点での通好には反対だが、西洋の学問に目を向けて優れたところを学び、積極的に活用して国力の充実をはかるべきである」と述べられています。特に注目したのは、後者の方です。



谷家蔵 谷三山木像

谷三山 たに さんざん

享和2年(1802)に高市郡八木村(高取藩領)の商家に生まれ、10代の半ばで聴力を失いながらも、ほとんど独学で学問を究め、家塾「興譲館」を開いて多くの門人を育成しました。また、高取藩に出仕して、国内外の動きを見据えながら、活発な献策活動を展開しました。

三山は、森田節斎にとどまらず、長州藩の吉田松陰なども教えを請いにやってくるほどの卓越した学者でした。松陰は、三山は「師の師たる人」であり、「日本一の大学者」とであると評しています。慶応3年(1867)12月11日に没。

国書【こくしょ】

元首がその国の名をもって発する外交文書。

阿部正弘【あべまさひろ】

1819～1857 江戸末期の老中。備後福山藩主。幕末開国のときの老中首座として和親条約を締結。



高取町にある植村家長屋門
(奈良県指定文化財)

高取藩【たかとりはん】

大和国高取（現在の奈良県高市郡高取町）に存在した譜代藩。

植村家保【うえむらいえやす/ いえもり】

1837-96 幕末-明治時代の大名、華族。嘉永6年(1853)に近江膳所藩主本家より植村家興(いえおき)の養子となり、大和高取藩主植村家13代となる。文久3年天誅組の攻撃を受けたが撃退した。

吉田松陰【よしだしょういん】

1830-59 長州藩出身。54年、ペリー艦隊(黒船)に密航を企てて失敗、投獄された。出獄後萩で松下村塾(しょうかそんじゅく)を開き、高杉晋作や伊藤博文、山県有朋ら維新の人材を多く育てた。日米修好通商条約に絡んで幕府を批判して再び投獄され、安政の大獄で死罪となった。

用人【よういん】

家老を助け、藩政を処理する要職。

久保耕庵【くぼこうあん】

1815-1872 江戸後期-明治時代の医師。大坂の適塾で蘭学と西洋医学をまなぶ。谷三山の高弟としても知られる。弟の良平とともに郷里の大和宇陀郡で種痘を実施した。

「西洋ノ学、天文、地理、算術ニ長セリ、医方モ亦精緻ナル処アリト承ル」と、西洋の学問がいかにすぐれているかが書かれています。ここで三山は、「天文」「地理」「算術」「医方」の各分野における「西洋ノ学」のあり方について、わが国の学問や「漢方」と比較する形で論じており、「西洋ノ学亦大ニ用フベキコロアリ」と評しています。注目されるのは、これをふまえて、「官」に「西洋学」を設けて「儒学」の下に置き、西洋の学問に精通した者を集めて、オランダから献上させた書物の翻訳にあたらせ、『西洋本草』『西洋医方大成』『西洋地理大全』『西洋軍器考』『西洋兵学大成』などにまとめて「カノ長ズル所ヲ尽シ」、「諸国興亡治乱ノ蹟」を集成した『西洋通鑑』とともに刊行していく必要があると、提言していることです。

こうした谷三山の「西洋」に関する言説の多くは、彼自身の豊富な知識に裏付けられたものでした。このころには西洋の歴史や現状にかかわる書物を読んでいて、それらによって知識を得ていたようです。さらに、門人のなかにも蘭学に通じた人物が存在し、「西洋ノ学」、中でも「医方」については宇陀松山の蘭方医久保耕庵・良平兄弟のサポートが大きかったと思われます。

三山は、弘化4年(1846)に森田節斎と筆談した頃から、対外問題について深い関心を寄せるようになっており、海外の歴史や地理について探究し、欧米列強の現況についてよく把握するようになっていました。このことについて特に留意しておきたく思います。

三山は、「相在室」という扁額が掲げられた一室で時間を過ごしなが、世界の動きを見つめていました。このことは高取藩の用人であった築山愛静宛の手紙の文面からよくうかがえます。その中でイギリスやアメリカの「強盛」、これらの国々がなぜこれほど強くなったのかについて、軍勢力だけではなく、学校教育が充実しているからだとし、特にアメリカに学



札の辻交流館での展示の様子

んで学校教育制度の整備をはかることが肝要であると述べています。この点に注目しておきたいと思います。(文面は別紙参照)

谷三山が『靖海芻言』の執筆に着手するようになるより少し前、嘉永6年(1853)の4月と5月に、長州藩の吉田松陰が彼のもとを訪れています。松陰23歳、三山52歳のときで、かなり年齢差がありました。

吉田松陰は、その3年前から諸国を遍歴し、各地の学者を訪ねるようになっており、その一環として、八木にも足を運び、三山に教を請うことになったです。仲介したのは森田節斎でした。三山は耳が不自由であったため、筆談でやりとりしたようで、そのときの吉田松陰の直筆の文面が何枚か谷家に残っています。八木札の辻交流館でパネル展示されていますので、四時半頃までに入るとみられます。

このときにどういうことが話題になったのか、詳しいことはわかりませんが、三山が著した『海外異伝商推』や安積良斎の『洋外紀略』といった書物のことが話題となり、会沢安(正志斎)の『新論』をはじめ、水戸学にも話が及んだことがわかっています。

三山は海外の事情に通じており、このときの彼の言説が佐久間象山の言説とともに松陰のそののちの行動、海外渡航の企てに影響をあたえた可能性も高いのではないかと考えています。

吉田松陰に続いて、同年の12月には、松浦武四郎(蝦夷地を北海道と命名した人物)も、八木にやってきて三山と筆談し、北方問題について意見を交わしています。その際の筆談記録で注目すべきは、『環海異聞』という書物のことです。この書物は、文化4年(1807)に大槻玄沢が編集した世界地理書です。このほか、最新の世界の地理や情勢が記された清の『海国図志』といった書物などに学びながら、三山は海外のことについての知識を深めていったと考えられます。

谷家に、三山の蔵書はほとんど残っていません。明治27年(1894)に郡山尋常中学校に移管されたのち、残念なことに焼けてしまったのです。しかし、蔵書リストは残っており、その中に、『海国図志』などの書物もでてしますので、それらを通して三山は世界に目を向けていたことがうかがえます。

谷三山 開港以降の言説

わが国は通商条約を締結した翌年から、外国と貿易を開始するようになります。これに伴って外国から安い綿製品が国内市場へどっと入りこんでくるようになりました。そうすると、綿をつくり、糸を紡ぎ、織るという仕事に従事していた人たちの生活が非常に苦しくなりました。さらに米穀の値段がぐっとあがり、世の中に困窮した人たちが満ちあふれるような状況になりました。そういう状況の中で三山は、「攘夷」ということを強く主張するようになりました。困窮している人たちの生活を改善するためには攘夷が不可欠であると、庶民生活に目を向けるなかで考え



『西国三十三所名所図絵』

八木札の辻交流館

市指定文化財「東の平田家(旧旅籠)」に平成24年(2012)開館。平田家は古代大和の主要道路「下ツ道」と「横大路」との交差点である「八木札の辻」を挟んで西側の平田家、東側の「平田家」が向かい合って立地し、いずれも江戸時代の旅籠の風情を残している建物。

安積良斎【あさかごんさい】

1791-1861 江戸後期の儒者。陸奥生。佐藤一斎・林述斎に学び、私塾見山楼を開く。また詩文家としても名を得る。二本松藩儒・藩校教授・昌平黌教授。

松浦武四郎【まつうらたけしろう】

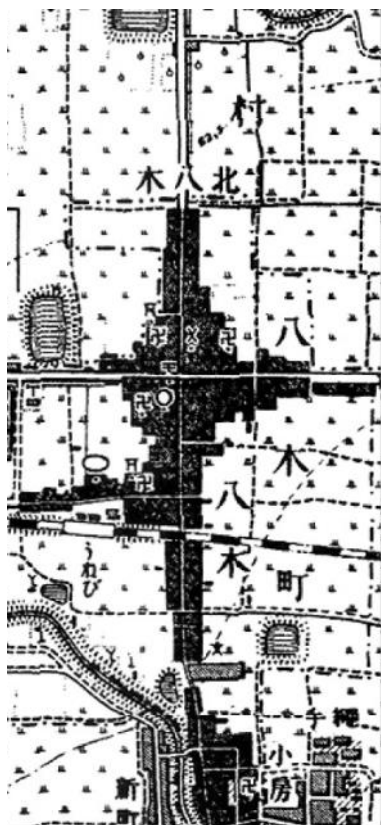
1818-1888 伊勢国松阪生まれの探検家。幕末に蝦夷地(現北海道)を歩き、「蝦夷日誌」と呼ばれる調査記録をまとめた。アイヌ民族とも交流を深め、北海道開拓の基礎をく。

大槻玄沢【おおつきげんたく】

1757-1827 江戸後期の蘭学者。陸奥の人。杉田玄白・前野良沢にオランダ医学とオランダ語を学び、長崎に遊学。著「蘭学階梯」「重訂解体新書」など。



谷家南側路地 西を見る



明治41年測図 大和八木
今昔マップ on the web

重斂【じゅうれん】
課税を強化すること。

聚斂【しゅうれん】
きびしく租税を取り立てること。

儒学【じゅがく】
中国古代の儒家思想を基本にした学問。自己の倫理的修養による人格育成から最高道徳「仁」への到達を目指し、また、礼楽刑政を講じて経国済民の道を説く。のち、朱子学・陽明学として展開。日本には4、5世紀ごろに「論語」が伝来したと伝えられ、日本文化に多大の影響を与えた。『デジタル大辞泉』

素読【そどく】
漢文で、文字だけを声に出して読むこと。

商推【しょうかく】
比較して考えること。

るようになったからです。

三山は、文久・元治期の上書では、「尊王攘夷」を明確に唱えるようになっており、『靖海芻言』に代表される開国期のそれに比べると、変化のあとがうかがえますが、その背景には「尊王攘夷」運動の高揚とともに、開港以降の経済の激変にともなう窮民の増加という事情が介在していました。三山が「尊王攘夷」の立場を明確にし、「攘夷」の決行を強く主張するようになった背景には、こうした開港以降の社会状況の変化と民衆の動向があったわけです。彼は、「百貨」の騰貴と「兆民」の困窮が進むなか、民生の安定をはかるためにも、「攘夷」を急いで決行しなければならないと、考えるようになったのであり、彼の「攘夷」論のベースには「安民」論が存在していたのです。

また彼は、「強兵安民」という言葉を用いていますが、「攘夷」を実現するために必要不可欠な「強兵」もまた、彼にあっては民生の安定をベースにしたものでした。

三山の言説は、「藩を下から支える『民』が貧しければ、『武備ヲ修ムル』ことも不可能であり、「民生」の安定があつてこそ『強兵』をはかることができる」というものであり、彼が「民」への「重斂」を強く戒めているのはそのためでした。「聚斂」をおこなわず、むしろ「賦ヲ省キ税ヲ薄ク」することによって、「民生」の安定をはかることが大切であるという主張は、嘉永元年(1848)の上書以降、一貫して見られるものであり、彼の立論(「強兵」論や「攘夷」論)のベースには、こうした考えが存在したのです。

彼の目は世界に向けられていたということ、また「民生」の安定、すなわち庶民生活の安定ということが、彼の言説のベースをなしていたということに改めて注目しておきたいです。

興譲館と門人たち

谷三山は興譲館【こうじょうかん】という塾を開き、そこで多くの門弟を育てました。天保11年(1840)には塾約(塾の規則)を定めています。その全文が谷さんのところに残っています。私が注目しておきたいのは、読書や作詩・作文とともに、「商推」「討論」、つまり門弟同士があるテーマで議論し合うことが重視されていたという点です。このやり方は、吉田松陰が松下村塾で採用するやり方の先駆けをなすものでした。

三山は、「興譲館」での教育において、門人それぞれの個性や主体性を尊重する方針をとっており、彼らを自らの世界に押し込めようとはしませんでした。逆に『靖海芻言』を起草するに際して、「西洋ノ医方」に通じていた久保耕庵に教示を仰いでいるように、門人たちの言説に耳を傾けて、それぞれの秀でた部分から学ぼうとしており、そうすることによって、自らの世界をひろげるとともに、見識をさらに深めようとしていたことがうかがえます。教育者としてのすぐれたあり方だと思えます。

門人の構成と高弟の足跡

「興譲館」の「塾約」の記載から、谷三山の門人には、寄宿生と通いの者が存在し、倉敷や能登など遠方から学びにきていた人もいました。近辺の人は通いで教を請いに来ていました。近くの村の子弟も「素読」を教えてもらっていたようです。

門人については、今のところ50何人かの名前や身分・階層がわかっています。武士(奈良奉行所の役人、高取藩士、旗本平野氏家中、同神保氏家中)や百姓、町人、医者、僧侶、神主など、多様な人々によって構成されており、三山を中心に、身分や職業という枠組や地域を超えた学びの場が形成されるようになっていたことが、注目されます。

その高弟のなかには、久保耕庵・良平兄弟のように「蘭学ニ精シク洋医ヲ業」とする者や、岡本通理(高田)や楠奈良之助(畑)のように国学に通じていた者も存在していました。当時にあつては、いずれの学問を究めようとするに際しても、儒学(漢学)が不可欠な教養となっていました。三山の「興譲館」での教育方針(指導者としての懐の深さ)も、いろんなことを学んでいく門人が存在したということに関わっていたものと思われまふ。

谷三山の薫陶を受けた高弟の多くは、大和や近国の藩の儒者となって文教面で活躍しましたが、前部重厚(小房)や久保兄弟のように、政治や社会、医療の分野において、大きな足跡を残した人物や、石河正竜(確太郎)のように、経済面で大活躍し、「わが国近代紡績の父」と称されるまでになった人物も存在しました。このような多くの門弟を育成したという面でも三山は、大きな功績を残したということです。

薩摩と大和を結んだ石河正竜

石河という家は、石井と名乗っていた時期もありました。石河は祖先の発祥地の郡名で、系図によりますと、楠木正成の弟正季【まさすえ】の系譜に連なります。正竜は22代目にあたります。石井は荘園の地名です。河内にルーツがあり、7代目のときに大和の高市郡石川の地に移住をし、村の庄屋を務めるようになったようです。

18代目からは医術を業とするようになりましたが、そののち家の勢いは傾き、さらに非常にショッキングな出来事がおこることになります。

石河正竜の義兄(お姉さんの夫)が放蕩をし、莫大な借財を抱えることになったため、村にとどまれなくなったのです。これにより、正竜は弘化4年(1846)4月に江戸に赴いて、杉田成卿(せいけい/杉田玄白の孫)の門をたたきました(お母さんもいっしょについていきました)。また弟の正昭は、妹とともに谷三山のところに寄宿して世話を受けることになりました。



石河正竜(確太郎)

文政8年(1825)に大和高市郡石川村で生まれ、谷三山の薫陶を受けた後、苦学しながら江戸や長崎に赴いて蘭学を学びました。安政4年(1857)に、開明的な名君としてよく知られる島津斉彬によって薩摩藩士として召し抱えられ、グローバルな視野のもと、幕末・維新时期において、当藩の殖産興業政策の推進に大きく貢献しました。廃藩置県の後には新政府に出仕して、近代産業(なかでも綿糸紡績業)の育成のために奔走し、わが国「近代紡績の父」と称されるまでになりました。明治28年(1895)に没。



橿原市石川町の鯉池と孝元天皇陵



榎原市石川町の町並み

大村益次郎【おおむらますじろう】
1825-1869 幕末の兵法家。周防の人。戊辰戦争ですぐれた軍事指揮を執った。日本の兵制の近代化に尽力したが、反対派浪士に襲われて死亡。

島津斉彬【しまづなりあきら】
1809-1858 江戸末期の薩摩藩主。早くから西洋文明に関心を抱き、開国・殖産興業を幕府に提言した。將軍継嗣問題にあたり、一橋慶喜(ひとつばしよしのぶ)を擁立して井伊直弼(いいなおすけ)と対立。藩内でも紡績機械・反射炉などを設置し、殖産を奨励した。

開成所【かいせいじょ】
江戸幕府の設けた洋学校。オランダ語・英語・フランス語・ドイツ語などの外国語、天文・地理・数学などの科学、また、活字術などを教授。

産物会所江戸中期以降、諸大名家に設けられた領内特産物奨励の機関。国産会所。

江戸で杉田成卿の門人となった正竜は、当時石井密太郎と名乗っていました。その後長崎にも赴いて、大変苦労しながら蘭学を学び、江戸に戻って洋書の翻訳などをしながら生計を立てるようになりました(この頃いろんな藩が西洋の書物、特に軍事的な書物から知識を得て活用していこうとしていたので、翻訳をする人は重んじられたようです)。

そうしたなかで正竜が非常にできる人物だと注目されるようになり、津軽藩、津藩、薩摩藩からうちの藩へ来てくれ、とお呼びが掛かるようになりました。当初は津藩に召しかかえられましたが、うまくいかなかったようで、津藩を逃げるように離れ、安政2年(1855)に山田正太郎と名前を変えて鹿児島へ亡命しました。この鹿児島で薩摩藩士として登用されます。薩摩藩は明治維新で非常に大きな力を発揮した雄藩ですが、雄藩の大きな特色は、財政面での強化をはかり、富国強兵を実現していったこと、もうひとつは、有能な人材と登用し活用していったことにありました。人材の活用に関しては、藩の中の中下士層をもっと高いポストにつけるだけではなく、武士でなく支配されている民間の有能な人材も藩士として取り立てて活用していくこともやっています。

長州で民間から登用された有名人に村田蔵六(大村益次郎)がいます。彼は元々お医者さんで、西洋のことに通じており、軍事のことについても詳しく、長州戦争の時に大きな力を発揮するに至っています。

薩摩の場合、外から登用され活用された有能な人として、石河正竜がいたわけです。彼が正式に薩摩藩に登用されたのは安政4年(1857)の5月のことで、ときの藩主は開明的な名君島津斉彬でした。その際の辞令には、「蘭学宜もの候付、此節御家中ニ被召抱、御小姓組江被入置、御切米十石被下置」とあります。正竜の弟の武次郎も、この後当藩に召し抱えられることになり、正竜の片腕として活動していくことになりました。

石河正竜は明治維新の主役を担った薩摩藩の経済面でのキーマンの一人になっていきました。政治の面でいえば、皆さんご承知の西郷さんとか大久保さんとかが非常に重要な存在でしたが、経済面では石河正竜や五代友厚が非常に重要な役割を果たしていくことになりました。

石河正竜は、元治元年(1864)に開設された開成所の蘭学教授にも任じられました。そしていろんなことを提言していきますが、ひとつは薩摩藩の物産と他の地域の物産を交易することによって、薩摩藩の利益を高めていこうとするものでした。

石河正竜の物産交易構想

まず、文久2年(1862)12月の建議において、薩摩藩の物産を大和で売りさばくことを提案しています。石河にとって大和は出身地で、事情をよく知っている場所です。当国のどこに薩摩藩の物産を売りさばく会所を設けるのかについては、南の方は高市郡の曾我村(竹ノ内峠から高田

を経て八木に向かう街道筋の集落、旗本多賀氏の陣屋があった場所)が、北の方は郡山城下がふさわしいとしています。

この2箇所には産物会所を設けて、薩摩藩の物産と大和の物産との交易を行おうという提言なのですが、それを軌道に載せる前に大和の人々が喜びそうなものを大和で売って、当地の人々が薩摩の商品は良いという印象をもってもらふ必要があると提言しています。

どのような物産かというと、「牛馬の皮」、そして「塩魚」(大和には海がありませんので当地の人は喜ぶだろうと述べています)。そして「藍玉」。これは何に使いますか? 染め物ですね。幕末の大和では木綿織が盛んに行われていました。単なる白木綿でなくて、糸を染めて、縞木綿にしたり、緋といっているような模様を織り出したり、そういう形で織った「ブランド商品」を売り出そうとしていたんです。

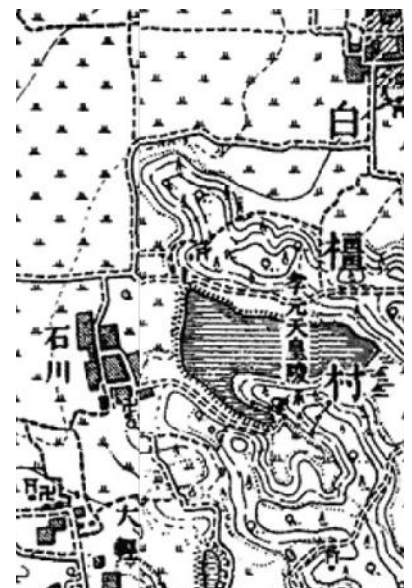
大和緋や縞木綿を作るときに糸を染めることが必要でした。そこで藍玉をもっていったら大和の人々に喜ばれると思ったわけですが、当時の薩摩は藍作りが盛んな場所ではなかったのです。当時藍作りの一番盛んだったところは阿波でした。そこから藍作りに精通していた家族を高いお金を出して薩摩に呼んで、藍作りをさせようと考えたんですね。

続いて、文久3年(1863) 9月の建議です。これは島津久光が江戸へ下って国元へ戻ろうとしているときに、生麦というところで薩摩藩士がイギリス人を殺傷するという事件があって、その仕返しでイギリスが鹿児島を攻めた事件(薩英戦争)の2ヶ月後に出されたものです。この時期に正竜は続々と意見書を出していますが、そのうちのひとつです。大変面白い内容で、三角交易を行うことを提案しています。「日本内々の事」にて「大交易」(外国との交易)には至らないが、薩摩の物産を「和州・河州」(大和・河内)へ販売して「綿・木綿」を購入し、これを「奥州・羽州」(東北)へ持って行って売り込むというわけです。なぜかといえば、綿や木綿が乏しい場所であったからです。そして「米・大豆」を当地で購入して薩摩に送るというわけです。

「奥州・羽州」とありますが、具体的には酒田です。実は彼が江戸で学んでいましたときに同門であった本間郡兵衛という人物がおり、彼とは懇意でした。本間郡兵衛は大地主本間家の分家の出身でした。こうしたつながりがあって大和や河内の綿や木綿を酒田に持って行って売り、そこで米や大豆を購入して薩摩に送ることを考案したのです。

そうすれば「上方筋中国筋等に事ある時」にも国元への「食道」は絶たれず、「富国強兵の一端長久安国の道に可有御座哉に奉存候」と述べています。

どういうことかといえば、この頃は、国内情勢が非常に不安定で、外国との関係においても薩英戦争などが起き、それまでだと大坂から瀬戸内海を経由して米とかが薩摩へもたらされていましたが、瀬戸内海で



明治41年測図 石川村
今昔マップ on the web

島津久光【しまづひさみつ】

1817-1887 江戸末期の政治家。薩摩の人。斉彬の異母弟。忠義の父。斉彬の死後、子の忠義が藩主となったのちは藩政の実権を握った。藩内尊攘派を弾圧して公武合体に奔走。明治7年(1874)左大臣になったが、まもなく帰国して隠退。

生麦事件【なまむぎじけん】

文久2年(1862)薩摩(さつま)藩の島津久光一行が江戸からの帰途、横浜生麦村にさしかかった際、騎馬のまま行列を横切った英国人4人を殺傷した事件。

薩英戦争【さつえいせんそう】

文久3年(1863)鹿児島で英国東洋艦隊と薩摩藩との間で行われた戦争。前年の生麦事件が原因。両軍ともに大きな損害を被り、同年講和。以後両者の提携が進んだ。



国土地理院

幕末・明治の略年表

1853(嘉永6) ペリー来航
 1854(嘉永7) 日米和親条約締結
 1854(安政元) 日露和親条約調印
 1856(安政3) ハリス来日
 1857(安政4) 松下村塾開塾
 1858(安政5) 日米修好通商条約調印、安政の大獄
 1860(安政7) 桜田門外の変
 1862(文久2) 生麦事件
 1863(文久3) 薩英戦争
 1864(元治元) 池田屋事件
 1866(慶応2) 薩長同盟
 1867(慶応3) 王政復古の大号令、谷三山没
 1868(慶応4) 鳥羽・伏見の戦い、戊辰戦争、年号明治
 1869(明治2) 東京遷都、版籍奉還
 1871(明治4) 廃藩置県
 1872(明治5) 学制公布、富岡製糸場設置
 1873(明治6) 徴兵令、地租改正
 1874(明治7) 民撰議院設立の建白
 1875(明治8) 樺太・千島交換条約締結
 1876(明治9) 廃刀令
 1877(明治10) 西南戦争
 1881(明治14) 国会開設の詔
 1885(明治18) 内閣制度
 1889(明治22) 大日本帝国憲法
 1890(明治23) 第一回衆議院議員総選挙、第一回帝国議会
 1894(明治27) 日英通商航海条約調印
 1895(明治28) 石河正竜没



ミグランスでの講演会の様子

ことが起きたら、そこを船で通れなくなりますから、米の少ない薩摩としては、違うルートの確保が必要でした。だから酒田から日本海を経て薩摩に持ってくるというルートを設定すれば、薩摩にとっては大きな生命線になると考えたのです。

正竜は同じ年の11月に「大交易」についての提言も行っています。イギリスは綿工業が世界で一番盛んであった国で、アメリカではその材料となる綿花が栽培されイギリスに売り渡されていましたが、当時のアメリカは、南北戦争をの最中で、綿を外国に売るといふには非常に混乱した状況にありました。

そうした情勢を彼は知っていたわけです。だから今、わが国で綿を買い集めてイギリスに売るとすごく儲かる、と提言したのです。

事実日本の綿が集荷され、長崎のグラバー商会を通してイギリスへ送り出されたといわれています。

さらに正竜は、元治元年(1864)5月にも提言を行っています。この当時彼自身は、大和における薩摩藩の「北方」の産物会所は郡山城下に設けるべきであると主張していましたが、奈良の商人らが大阪百間町の薩摩藩の蔵屋敷に願い出て、奈良に設けられることになり、銀札を発行して交易が行われることになりました。正竜はこれに異を唱え、産物会所はやはり郡山城下に設けるべきで、銀札の発行は時期尚早であり、薩摩藩の信用を得てから発行すべきであると述べています。

薩摩藩と大和との物産交易に関しては、必ずしも石河の思惑通りにことが進んだわけではなく、大和の「北方」では奈良を拠点に交易が行われるようになりました。

物産交易の展開と大和の豪農商

私は生駒に住んでおり、生駒市域の古文書の調査を20年ぐらい細々と続けてきています。そのなかで生駒の一番北の高山の中谷家の調査をしておりましたときに、石河正竜・弟武次郎から幕末の当主吉兵衛に届いた手紙など50点ほどが見つかりました。これにより中谷吉兵衛も薩摩藩との物産交易に関与していたことが浮かび上がってきたのです。

元治元年(1864)10月5日付の石河確太郎宛中谷吉兵衛書状には、「先日者於南都御会所緩々拝顔被仰付難有仕合奉存候、然者今般大和表ニて御銀札御取行之道御開立ニ相成、御都合能御事済ニ相成候段恐悦至極奉存候」とあり、奈良に(産物)会所が設置され銀札が発行されるはこびになったことが知られます。また、この会合には多人数参加したと記されています。中谷吉兵衛だけでなく他の大和の豪農商らもこれに加わって、薩摩藩との交易をやり出したというように考えられます。

交易品としてどういうものがあつたのかが、中谷家の文書からわかってきています。大和から薩摩へは、綿、綿種・粳稻・茶種子、稻扱き、硝石

(黒色火薬の材料)などが送られました。稲扱【こ】きに関しては、慶応3年(1867)9月に「御試」用として540挺が送られ、翌年閏4月には薩摩藩から2～3000挺を送ってほしいという依頼があったことが知られます。

一方、薩摩から大和へは、大和ではとれない海産物(かつお節・飛魚・塩付肴)、肥料(油粕・干鰯)、菊油(きくあぶら/島津家の秘薬)、生蠟【きろう】、いすばい、細上布(薩摩藩が押さえていた宮古や八重山などで織られる織物)などでした。また、北九州産の石炭や周防平織のように、薩摩藩が他領で買い付けて送ってきた商品も存在していました。

こうして奈良の会所を介して大和の北方の豪農商と薩摩藩との交易が展開されていったのです。

大和の南方での交易に関しては、当初は曾我村に会所を設けて行おうと準備していたのですが頓挫してしまい、結局、薩摩の方から伊地知壮之丞や税所篤らが高田にやってきて、豪農商らと商談し、当地に国産会所を設けることになりました。これが前に進んだのは幕末の慶応2年(1866)の9月の頃で、第二次長州戦争で幕府方が敗北を重ね、将軍家茂の急逝を経て、休戦協定が締結される時期でした。

いよいよ幕府との対決が視野に入ってきた時期で、薩摩藩の上役の方には、大和と関係を結んでおくと、いざ戦という時には屯営を築いたり兵糧を確保したりすることに役立つという思惑もあったと思われます。

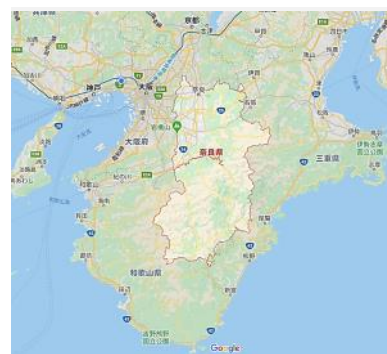
薩摩藩の紡績事業と石河正竜

石河正竜は、文久3年(1863)11月にも意見書を提出し、石河は、外国から紡績機械を輸入して薩摩で機械紡績を行うことを献策しています。正竜が紡績に深い関心を寄せるようになったのは、安政年間に藩主島津斉彬が、琉球から指宿の豪商を介してもたらされた洋糸を彼に見せ、「将来日本ノ膏血ヲ絞ルモノ」はこれだから、よく研究するようにと述べたことによると言われています。

これが契機となって、正竜は綿糸紡績の研究をし、機械を輸入して紡績業を行うことを提言するようになったのです。意見書には、「凡地球之出す所之産物にては綿最大なる者(物)と申候も、(中略)器械相開候てよりの事に候」(薩摩にて)迫々機械相整候上は、日本中之綿も御国江引候様相成可申候」と書かれており、注目されます。

彼の提言は採択されるところとなり、イギリスから紡績機械が輸入され、技師を招いて、鹿児島島の磯に日本最初の洋式紡績工場、鹿児島紡績所が開設されることになりました。

鹿児島島の磯公園に行かれたことありますか？そこにはいろいろ工場群があって、その中に紡績工場の跡がありますので、機会があればひ



Google Map

銀札【ぎんさつ】

江戸時代、諸藩が発行した銀貨代用の紙幣。

伊地知壮之丞【いじちそうのじょう】

1826－1887 幕末-明治時代の武士、官吏。

税所篤【さいしょあつし】

1827-1910 江戸後期-明治時代の武士、政治家。薩摩鹿児島藩士。文久2年(1862)、大久保利通らとともに西郷隆盛の奄美大島からの呼びもどし工作にあたる。戊辰(ぼしん)戦争では大坂で財務を担当。維新後は河内県、兵庫県、堺県などの知事、元老院議員、枢密顧問官などを歴任し、明治20年(1887)に奈良県知事に就任した。

屯営【とんえい】

兵士がたむろすること。また、その場所。

兵糧【ひょうろう】

陣中における軍隊の食糧。



橿原市石川町の太神宮灯籠(天保11年)



明治42年測図の鹿児島島の織
今昔マップ on the web

慶応3年(1867)2月8日付小松帯刀宛伊地知壮之丞書状
「コンペニー取企一条、寺島江相談仕、石川(河)江託し手を付申候、随分泉州境(堺)・大和・河内・和泉は出銀為致候都合相調儀と奉存候、追々は出羽・近江辺迄も手伸可申候、尤御国許大家商人共にも相応出銀為仕可申候、左候ハ、数十万両の本(元)手相備候様可罷成」
株式会社の様なものをつくってお金を出させて協力させる動き。



札の辻交流館での展示の様子

見られてください。

「鹿児島紡績所沿革」には、「慶応3年(1867)5月に竣工。職工は200名、10時間操業で平均48貫(180キログラム)余を紡績し、紡糸はすべて整織したうえで白木綿を大坂に移出し、縞木綿は城下で販売した」と書かれています。

この紡績機械の買い付けに尽力したのが五代友厚でした。

イギリスへの使節・留学生の派遣、薩摩藩は、慶応元年(1865)に、新納刑部・松木弘安(寺島宗則)・五代友厚らをイギリスへ派遣しました。その際、五代は、紡績機械の購入、技師の招聘にあたっています。この使節・留学生の派遣についても、石河正竜の意見書が大きく影響していたと思われます。正竜は、前年の10月8日付で大久保一蔵(利通)宛に上申書を提出して、藩士中の少壮人材の海外への派遣の必要性を説き、「御遣ハシニ可相成国ハ先ツ嘆咭唎ト奉存候」と述べています。これに基づいて留学生が派遣され、その一人の五代友厚が紡績機械を買い付けて帰国し、鹿児島の磯で紡績が開始されたことになったのです。

さらに、堺にも薩摩藩の紡績所が作られることになりました。鹿児島の磯を第1号とすると、堺が第2号にあたります。場所は戎島で、慶応2年(1866)に蔵屋敷の建設を目的として購入した土地に設置されることになりました。興味深いのは、この頃薩州商社(コンペニー、株式会社の様なもの)の取立構想があり、堺紡績所の設立はこの計画の一端であったと考えられることです(左参照)。

この紡績所の建設に先立って、先ほど名前を挙げました生駒高山の中谷吉兵衛は、堺に紡績所ができたときに綿を買い集めて堺に売る役を命じられています。

この事実を知って不思議に思ったのは、高山は茶筌で有名ですが、綿作りがさらさら盛んではなかった高山の豪農の中谷になぜ綿を集荷する役が回ってきたのかということでした。高山は生駒では北の果て、また奈良県では西北の隅に当たります。当初、私の頭に浮かんだのは、奈良県の地図だけでした。しかし、もう少し広い地図でみると、高山は国境に位置し、ちょっと峠を越えると、北河内の枚方や南山城にすぐ出られることがわかります。そこらは綿の特産地であったのです。だから資力があれば北河内や南山城へ出かけていって綿を集荷することが十分できたのです。先入観ってこわいと、思い知らされたできごとでした。

「御一新」の後、新政府は明治4年(1871)7月14日に、中央集権国家の形成をはかるため、廃藩置県を断行しました。これに伴って、薩摩藩がなくなり、紡績所は明治政府に買い上げられることになりました(石河正竜は引き続き操業に従事しています)。明治5年(1872)までに日本にできた紡績所は、薩摩藩が作った鹿児島の紡績所と堺の紡績所、東京鹿島の紡績所で、あわせて始祖三紡績と呼ばれています。

明治政府による紡績業の育成政策と石河正竜

明治維新は、欧米資本主義列強がわが国にもやってくるという国際的な情勢のもとで行われました。新政府の目標は、そういった欧米列強に対峙できるような強力な統一国家の形成を図ることにありました。あちこちに藩があるようでは外国と対抗できず、また税制の面からも、中央集権国家の構築が急がれたのです。そして廃藩置県の後、新しい体制のもとで、近代化(文明化)をはかるための政策が次から次に実施されていくことになりました。

地租改正や殖産興業、徴兵制や学制の実施、近世的身分制の廃止、改暦などがそうで、断髪令や裸体禁止令のほか、身体・習俗面の文明化をはかり、文明国にふさわしい国民をつくっていかうとする政策も展開されました(たとえば、外国人が来たときに禪一丁でうろうろしているようでは、なんという国やと思われてしまうので)。

経済面では、殖産興業の推進があり、近代産業の育成がはかられました。どこに力点がおかれたかという、輸出の「増進」と輸入の「防遏」でした。前者は、外国に向けて売れる商品をもっともっと売れるようにするもので、生糸やお茶に重点がおかれました。後者は輸入品を国内で作り、国内への流入を押し戻そうとするもので、綿糸に重点が置かれていました。

綿糸紡績業に関しては、良質で安価な外国の機械製の糸に対抗して、政府は明治10年頃から本格的に機械紡績の導入と育成に乗り出しました。明治11年(1878)には、イギリスより2,000錘ミュール紡績機2基を購入して広島県と愛知県に官立の紡績所を設立し、その翌年には、10基を購入して無利子10か年賦で民間に払い下げるようになりました。これを受けて各地で作られた民間紡績所が10箇所あり、これらを「十基紡」と呼んでいます。奈良県天理市の豊井(天理ダムの近く)にも作られました。

こうした動きのなかで、政府吏員となっていた石河正竜は、紡績業の育成に尽力していくことになります。『本邦綿絲紡績史』第1巻には、「本邦紡績業の始祖時代から政府奨励時代に亘り、全国紡績工場の殆んど総てを(石河が)設計建立した。(中略)我原始時代の紡績界は、全く石河翁の独り舞台の観を呈した」という記述がみられます。ここまで書かれるぐらいに正竜は各地に足を運び、指導にあたったというわけです。

その際に興味深いのは、薩摩藩がかつて設けていた鹿児島と堺の紡績所で紡績に従事していた人たちが動員され、各地に設立されることになった紡績所に指導に赴いているということです。

このように政府の奨励も有り、「十基紡」ができていくわけですが、順調にことが運んだわけではありませんでした。

廃藩置県【はいはんちけん】

明治4年(1871)明治政府が中央集権化を図るため、全国261の藩を廃して府県を置いたこと。全国3府302県がまず置かれ、同年末までに3府72県となった。

地租改正【ちそかいせい】

明治政府による土地・租税制度の改革。土地の私的所有を認め、地価の3パーセントを金納としたが、江戸時代の年貢収入額を維持する高額地租であり、軽減を要求して各地に農民一揆が起こった。

殖産興業【しょくさんこうぎょう】

明治初期において、先進資本主義諸国の外圧に対抗するため、近代産業技術を移植して資本主義的生産方法を保護育成しようとした政策。

徴兵制【ちようへいせい】

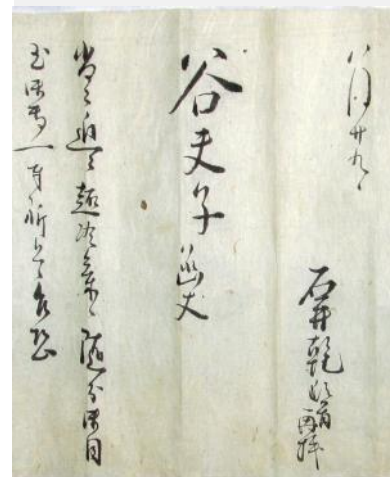
国家が一定年齢の国民に兵役義務を課して強制的に軍隊に入隊させる制度。日本では、明治6年(1873)発布の徴兵令に始まり、昭和20年(1945)に廃止。

防遏【ぼうあつ】

侵入を防ぎとめること。

ミュール紡績機【ぼうせきき】

おもに紡毛紡績に使用される精紡機。1779年イギリスの発明家サミュエル・クロンプトンが発明した。一人の織工が同時に1000以上の紡錘を稼働させることができ、織物工業向けの高品質な糸の大規模生産を可能にした。



谷家蔵 谷三山宛石河正竜太郎書状(写真: 奈良県立大学ユーラシア研究センター)



谷山正道先生の紹介

元天理大学文学部教授

1952年に奈良県で生まれる。広島大学・同大学院で学び、広島大学文学部助教授などを経て、1991年に天理大学に着任、2017年に退職する。現在、奈良県立大学ユーラシア研究センター(谷三山研究会)客員研究員、公益財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会研究員などをつとめる。専門は日本近世史、大和地域史。

主な著書に、『近世民衆運動の展開』(高科書店、1994年)、『民衆運動からみる幕末維新』(清文堂出版、2017年)などがある。博士(文学)。



『民衆運動からみる幕末維新』

わが国「近代紡績の父」石河正竜

「十基紡」のほとんどは、2000錠ミュール紡績機1基を備えた、職工5、60人程度の小規模なもので、資金面や動力面も十分なものではなく、経済不況(明治10年代後半の松方デフレーション)の影響もあって、経営難に陥るケースも少なくありませんでした。このように、わが国における綿糸紡績業の発展の道は、決して平坦なものではなかったのです。が、ようやく光明がみえるようになりました。明治16年(1883)に渋沢栄一の主唱により設立されていた大阪紡績会社が成功を収めたのを皮切りに、明治20年代に入ると、急速に発展するようになったのです。

大阪紡績会社は、政府の資金援助を受けない純然たる民間企業(株式会社)で、都市商人層や実業家、華族らが出資者でした。この会社が成功を収めた理由としては、①資金が潤沢であったこと、②スタート時から錠数10500・職工数322人という(当時としては)大規模な会社であったこと、③動力に蒸気力を用いたこと、④1日2交代制を採用して徹夜作業を実施し機械をフル稼働させたこと、⑤当初はミュール紡績機を使用していたが、増設過程で能率の高いリングに転換していったこと、が挙げられています。

この辺りからわが国の機械紡績業は軌道に乗っていくわけですが、この大阪紡績の設立に際しても石河正竜がでています。場所の選定や1万錠紡機据付費用の見積等々に関与しているのです。

石河正竜は、明治20年(1887)に退職し、同28年(1895)の10月16日に71歳でこの世を去りました。この間の彼の足跡について、絹川太一著『本邦綿糸紡績史』第1巻(199頁)には、「明治廿年後の紡績勃興時代に於てさへ有力なる紡績中、老後の翁の助力に俟つもの実に数者に及んだ」という記述が見られます。

近代において、綿糸紡績業はわが国の基幹産業の一つとなるに至りましたが、その発展の礎を築いた人物こそ、この榎原に生まれ、外に出て行きましたけれど活躍した石河正竜でした。彼がわが国「近代紡績の父」と称される所以です。

もう10年も前になりますが、まだ天理大学におりましたときに、研修旅行で岡山倉敷方面に行ったことがありました。その折に倉敷紡績の資料館を訪れ、クラボウの歴史に関する展示を見ていましたときに、石河ができました。「ああ、ここにも指導にやってきていたんだな」と思い感激しました。

今日は、資料が多くてついてきていただくのが大変だったと思いますが、最初に谷三山の主張や活動の概要についてお話しした後、その指導を受けた石河正竜の活動や言説について検討してきました。この石河正竜、弟の武次郎(正昭)と三山との関係については、詳しく知ることはむずかしい状況にありますが、谷家に残っている門人からの手紙から、武次郎は三山の近くにあって重用されていたことがわかりますし、

実現しませんでした。一時は養子にしようと考えていたことも知られます。兄の正竜(確太郎)に関しては、当人から谷三山に送ったの書状が残っています。これは薩摩に行ってからしばらくたってからのもので、暇乞いすることなく薩摩へ亡命した非礼を詫びながら、今鹿児島で自分がどうしているかを報じたもので、島津の殿様(斉彬)に召し抱えられ「国家重要之職」に任じられてがんばっていると書いており、彼が三山の門人の一人であったことが明確にわかります。この書状は7年前に谷家の文書を調査した際に見つかりました。正竜の字は独特なんです。その筆跡が目に見え込んで来て彼も三山の門人の一人であったことが、これによってはじめてわかりました。私にとって大変印象深い手紙です。それも含めて、資料に石河兄弟から谷三山に送られた手紙を引用していますので、ご覧になってください。

おわりに

谷三山と石河正竜の二人を比較すると、書物などを通して世界の状況を非常によく見すえていたことに共通点がありましたが、三山はその晩年(開港を経た文久・元治期)に「尊王攘夷」の立場を明確にして、外国勢力を排除すべきであると強く主張するようになり、正竜は、外国のすぐれた物を導入して国内の産業の育成をはかっていこうとする立場をとり、これを実現するために旺盛な活動を展開するようになっていきます。このことから二人は対照的であるように見えますが、三山の「攘夷」論は決してやみくもなものではなく、「民生」の安定ということをベースにしたものであった(開港以降多くの人々が困窮に陥るなか、庶民生活の安定を図るためには「攘夷」を急いで決行しなければならないと彼が考えるようになった)という点に留意すべきであると考えています。

二人とも榎原の出身で、大変すぐれた足跡を残されており、まさに偉人であったと考えています。

いつもこんなことを言って、笑われているのですが、谷三山と私には共通性があると思っています。私の苗字は「谷山」と言います。「谷三山」と非常に似ていて、三つの内の二つが同じですが、「三」のあるのとないのとではこれほどレベルに差があるのかと痛感している次第です。少しでも三山先生の域に近づけたらと思う昨今です。

お願い

石河正竜が20歳で村を離れて以降の様子はわかっていますが、それまでの石川村の中での石河家のあり方や正竜の活動のあり方については、今のところよくわからず非常に残念に思っています。

これを明らかにするためには、石河正竜の出身地である高市郡石川村の文書(山田家文書や区有文書など)の調査が是非とも必要です。



「奈良県立大学 ユーラシア研究センター情報誌「EURO-NARASIA Q」第7号に「幕末大和の大学者谷三山の足跡を追う」、NARA-EURASIA Institute's Report「谷三山師の師たる人。」

景観まちづくり講演会

榎原が生んだ偉人 谷三山と石河正竜

2020年1月19日(日)

午後1時30分～午後3時

聴講無料、事前申込不要

先着順 100名

会場：榎原市役所分庁舎ミグラ
ンス4Fコンベンションルーム

主催：NPO法人八木まちづくり
ネットワーク

後援：榎原市、奈良県立大学

谷三山
字久保(1825)に高市郡八木村(現高市郡八木町)に生まれる。19代の中では藩の士といながらも、ほとんど自学で学問を究め、家塾「蘭語塾」を開いて多くの門人を養成しました。また、蘭館に出入りして、蘭学外の働きを見学し、蘭館の内部事情を知るなど、蘭学・蘭館に精通しました。三山は、高市藩に出入りして、蘭館の内部事情を知るなど、蘭学・蘭館に精通しました。三山は、高市藩に出入りして、蘭館の内部事情を知るなど、蘭学・蘭館に精通しました。

石河正竜(確太郎)
文政9年(1826)に大分県高市郡(現高市郡)に生まれる。谷三山の蘭館を学び、蘭学・蘭館に精通しました。三山は、高市藩に出入りして、蘭館の内部事情を知るなど、蘭学・蘭館に精通しました。三山は、高市藩に出入りして、蘭館の内部事情を知るなど、蘭学・蘭館に精通しました。

同時開催イベント
谷三山 資料パネル展 入場無料、申込不要
日時：令和2年1月17日(金)～19日(日)
午前10時～午後3時(入場は午後4時30分まで)
場所：八木町の社交広場 2階 (榎原市北八木町2丁目1番1号)
八木ウォークイベント (参加費無料、事前申込して下さい、当日参加も可)
開催日：令和2年1月18日(日) 少雨決行
時間：集合 午前10時 終了 午後1時30分予定
場所：八木町の社交広場 2階 (榎原市北八木町2丁目1番1号)
定員：先着30名(申込、参加費無料)
申込方法：住所、氏名、連絡先(電話)、参加人数をFAXまたはメールしてください。
FAX 0744-25-6258 / MAIL info@h8machi.org
問い合わせ：NPO法人八木まちづくりネットワーク 090-1077-2295 (担当 平田)

FAX申し込み紙 FAX 0744-22-2010
お申し込みはFAXでも受け付けてあります。この用紙に記入の上、送付してください。定員に達し次第、締め切らせていただきます。この個人情報は関係の目的で利用することはありません。

参加者の住所氏名(関係の項目は省略可) 参加人数 参加費 参加日

講演会ポスター裏面

八木まちづくりネットワークから

サプライズがあります。

今日の話の中で五代友厚と石河正竜らが西洋に行ったとき、民衆が好んで飲んでいた紅茶、これを日本に持って帰ればと、交易構想の中にはまったのでしょね。

そういうルーツをもつ茶葉が鹿児島で栽培されていたものを、八木まちづくりネットワークの会員が2日前にみつけまして、急遽注文したところ、今日の講演会に間に合いました。

薩摩名産「紅富貴」です。

会場の外で紅茶を用意しております。当時の時代や今日の講演を思い浮かべて、どうぞ味わってください。



NPO法人八木まちづくりネットワーク

電子メール: info.yaginet@gmail.com

HP: <https://yagimachi-net.jp/>

※無断転載はご遠慮下さい。

講演と配布資料に基づき、また谷山先生のご指導を得て編集しています。注釈は編集者編記、特記なき写真等はNPOメンバー撮影やフリー素材を利用しています。不行き届きなどあれば、ご教授お願いいたします(080-3800-5650)。



実は石川へは何回も足を運んでおり、文書をお持ちのところを訪ねて、是非探しておいてくださいとお願いしているのですが、まだ拝見できていません。文書は確実にをお持ちだろうと思うのですが・・・。

今日の話をきっかけに、石川村の文書調査ができればありがたいなと思っています。

今日の私の狙いはそこにあります(笑)。是非ご協力を賜ればと思っております。

今日はたくさんの方にご来聴していただき、ありがとうございました。

谷家当主 谷 道央さんのご挨拶

谷山先生のお話しにお礼申し上げます。谷山先生とは10年ほど前に谷三山の話を読んだとき「実は私は谷三山の子孫に当たります。いくつかの谷三山の未整理の資料が残ってございます」と申し上げました。

そのことをきっかけにして、7-8年前でしたか、夏休みに1ヶ月かけて先生のグループの方がうちで資料整理をしていただいた中から、今日お話しいただいた石河正竜という「日本の紡績業の父」の手紙が出てきました。私も石河正竜のことは知らなかったもので、どんなに大人物か今日初めて十分に知ったところです。

先生の谷山正道というのは谷三山と二字重なっているという話でしたが、私も道央と申しまして谷山先生と名前が重なっています。三人で、三山、正道、道央と三つ重なっておるわけです。三山の方は少し上かと二番目が谷山先生、三番目が私です。(笑)

谷三山は一生、四畳半の部屋に暮らしたと思っております。一方石河正竜さんは日本全国を舞台に飛び回りました。まさに「静」と「動」のふたりが、「四畳半」と「全国」が、ここで結びつくとは、誠に不思議な話かと私自身聞きながら、その情景を浮かべておりました。

今から2-30年前、文化庁から私のところに電話が掛かってきました。「谷三山の手紙を古書店で手に入れて、その解説書を文化庁の雑誌に記載したので読んでください」との電話だったのですが、それに付け加えて、「谷三山は不幸な学者です。言いにくいのですが、大変学識豊かなので、そのために今の学者で谷三山を取り上げる勇気ある人がいない。学者として谷三山を研究対象にしたために、一生を無駄に過ごすという嫌いがあるので、学者は避けて通っています」という話でした。

三山はそういう運命の人かなと思っていましたところ、突然奈良県立大学で谷三山をテーマに取り上げていただけるということで、文化庁の方の予言とは反して、奈良県の大学が力を合わせてくださいました。「谷三山生誕150年」では、榎原市も大応援していただいたわけです。

谷家としては幸運に恵まれたと思っております。今日は、石河正竜がこの榎原の地でお生まれになり、そんな見渡せる範囲に住む二人について、谷山先生から詳しくお話していただいたことは、谷家にとって大変ありがたいと思っております。